

生活空間における「ゆとり」調査
～ 沖縄県竹富町における社会学的予備調査報告 ～

阿部眞雄、内藤堅志

1) 都市化・観光化と景観

黒川紀章は、「機械の原理は無駄なものを省くことによって成り立っているが、生命の原理は無駄なものを取り込むことによって成り立つ。それが「間」「隙間」「中間領域」「共生」という原理に発展していく。」と述べているが、鳴海邦碩は、「景観の問題は都市基盤の未整備と関係がある。都市基盤が弱いままで景観施策を進めても意味がない。」としており、黒川の建設理念にある「間」や「隙間」は、「ゆとり」として機能することもあるが、一つ間違えれば、宮田登の「都市の妖怪」を生む土壌にもなる。

ヴァルター・ベンヤミンの『パサージュ論』で、「パサージュは外側のない家か廊下である — 夢のように。」とドイツ占領前の華やかし頃のパリの町並みを表現している。町並みは、時代を表し、形はそのままでも生活者の利用形態は大きく変わり、古い町並みもそのままではおられない。しかし、旅行者が訪れ、過去の栄光をかいま見ることのできる町並みにも生活者の臭いが強くしみこんでいる町がある。

日本も町並み景観を残そうとする努力は各所で行われている。地元民が了解し、町自体の繁栄にもつながれば良いが、観光目的だけでは、住民の生活と町の施策にギャップを生じることがあるやもしれない。

2) 沖縄八重山地域の観光資源

沖縄県竹富町竹富島は、中心部である住宅街に町並み景観規制を行っている。白雲沸き立つ青い空、白砂の道、青々とした樹木、珊瑚で作られた塀、ピンクのブーゲンビリアや紅色のデイゴの花々が咲き乱れる赤瓦の家並みの間を牛車に揺られわずか40分の「旅」であるが、ゆっくりとした牛歩と現地「おじい」の案内による三線の音と沖縄民謡「安里屋ユンタ」が心地よい南国の夢へと誘われる。竹富島の住民は約260名で、高齢者が多数を占める。民宿やそば屋の経営者、郵便局長、通りや船で出会ったおじい・おばあたちは、お

むね景
観の維持

に肯定的であった。村落としての伝統的建造物群保存地区は9カ所であるが、それからみても、広く指定されておらず面積は33.8haと平均的である。毎年、秋には無形文化財である種子取祭が行われ、いわゆる「ディアスポラ」の再集結の様に10日間の間は、住民は十数倍に増加する。300人を割る住民の生活を支える基盤として観光と祭りと日々の生活が三位一体となり、この地域を支えている。



竹富島風景 水野先生 撮影



石垣島からわずか 15 分の船旅でこのような別世界を味わえる場所はほかにはなかなか見あたらない。景観を守ったことが、人気の秘密であろう。観光業者も心がけておりこれ以上竹富島を開発しようとは考えていない。ここを管理する竹富町も、次の観光開発の焦点を、西表島へと移している。

竹富町は八重山諸島のうち竹富島、小浜島、黒島、西表島、由布島、波照間島、鳩間島、新城島の八島から成っている。

小浜島には大型リゾート施設が二カ所、日本の最南端ゴルフ場が一カ所ある。2001 年のNHK朝の連続ドラマ「ちゅらさん」で人気を博した島であるが、未だに人気は衰えていない。

黒島もリゾートが一つに民宿が多数あり、毎年二月の「牛祭り」には多数の観光客が来島する。

西表島は日本最初にエコツーリズム協会が組織されたことでも有名な「秘境」である。日本には「東洋のガラパゴス」と呼ばれる島が三つある。小笠原諸島、奄美大島そして西表島である。特に西表は原生林とそこに住む生物種が豊富なことで有名である。観光客もダイビング、カヌーなどのネイチャーレジャーだけではなく、由布島への経由地としても有名である。また最近では、日本最西端の温泉、西表温泉を拡充し、民宿しかなかった西表としてはホテル並みの宿泊施設を併設した。また、新たなリゾート開発も計画されており、ユニマツト社が浦内地区でのホテル（2 棟 161 室）と浦内川河口域や宇奈利崎など 5 カ所でレストラン、コテージ、公園などの建設を計画している。開発面積は合計 13 万 4849 平方メートル、ホテル、コテージ合わせ 463 室となり、竹富町では小浜島に引き続く大規模観光開発となる。

由布島は、竹富町では最も有名な島である。大塚勝久の写真集「南の風」が拍車をかけたが、西表島から由布島へ、潮の引いた浅瀬を牛車で渡るといった絵が大いに評判となり、観光の名所になった。

残る三島もダイビングなどマリンスポーツの施設はあり、観光資源には事欠かない。

3) 竹富島は成功事例

竹富町の観光開発は、今後のレジャー（ゆとり）資産のいろいろな意味での手本になると思われる。竹富島の成功例は、客であるツーリストと住民であるレジデントの間に適度な緊張が要因の一つとなっている様だ。他の観光地と比較し、レジデントがツーリストにこびず、自らの文化に誇りを持ち、それを続けて持つことのできる島・町並み景観・自分たちのために行う祭りという資産があったからこそであろう。また、商品としての価値が高い伝統工芸品を地域で保全していることも重要な要素である。

この緊張関係は、ツーリストへの教育や持続的なレジャー（ゆとり）資産の提供が可能となり、ツーリスト・レジデント間のバランスのとれた関係が維持されてきた。

レジャー（ゆとり）資産の運営で失敗した事例は、新規のコンテンツが持続的に作れない発信できないこと



「ちゅらさん」の舞台 こはぐら荘



ホテル建設予定地 水野先生 撮影

による集客力の低下、ツーリスト重視レジデント無視のホノルル症候群（ホノルルの住民はほとんどが外来者で占められ、ハワイ人は1%程度、観光施設で働く人間は、トップは白人、マネージャーは日系人、フロント・メイドはフィリピン人、ダンサーの半分は非ハワイ人）を起し飽きられてしまう。

4) 竹富町の今後

竹富島は、日本の他の町並み景観保全運動と同様に、地元民が了解し、町自体の繁栄にもつながっており、住民・文化・自然・経済がうまくミックスした形でできあがったものであろう。これが最高の解答ではないが、最善の解答の一つであらう。住民の文化・生活・経済・自然を配慮した開発が望まれる。

西表島月が浜に建設が予定されているリゾートホテルは、今後の課題としても、小浜島のリゾートは、生活も文化もなく、スポーツ・リゾートでイタリアンやフレンチを何故沖縄でという疑問はある。

また、もともとあった地域の生活道路は全て舗装され真っ直ぐなり、大型バスも通れる様になった。便利にはなったが、生活場面で散策するプロムナードはなく、観光客に向けた洒落た土産物屋が並ぶパサージュのようである。

5) 西表の住民のレジャー（ゆとり）資産

西表は縦社会が強く、高齢者が一番偉い。80歳高齢者が、「近頃の若者たちは」と60歳台のヤングオールド層（おじい予備軍）をあごで使う。集落ごとに農作業や神事以外に共同で行う文化事業が盛んである。公民館がその中心となっており、勢い、公民館館長は、その地区のリーダーとしての顔も持つ。彼を頂点とした若者組が手足となって、祭りやその準備、各種交流会、運動会などたくさんの役割を持つ。もちろん、西表在住の若者たちはすべて無職ではなく、たいていは仕事に就いているため、相当多忙となる。特に収穫期や春・夏の祭りの時期は、観光客も多く、仕事と集落の役割で忙殺される。そして、彼らの唯一の娯楽は、仲間同士誘い合い、夕日の落ちた海岸で「毛遊び（もあしび）」という交流会である。歌と踊りと三線と酒で一時^{いつとき}を楽しく過ごすことが一つのレジャーにもなっている。その話は沖縄へ行く前から聞かされていたが、テレビやカラオケなどの近代的娯楽の前には、影を薄くしていると予想していた。しかし、数少ない若者同士が、コミュニケーションの場を模索すると「毛遊び」に行き着くようだ。

西表島は、農業が盛んな地域でもある。パイナップル・マンゴなどは代表例でその他、ドラゴンフルーツ、グァバ、パッションフルーツなどさまざまあり、農業経済の屋台骨の一つにもなっている。もともと西表はサトウキビと並んで米の栽培も盛んであった。また、牧牛も盛んである。

西表の某農家OY氏について労働時間などをお聞きした。戦後より両親がパイナップルの栽培を始め、当初は換金作物としてもはやされていたが、台風のため作物被害がたびたびあったが、一番つらかったのは、台風の余波で船が数日間出ず、出荷できないことであった。成人後、東京の大学で農業を学び、15年前から再び両親の跡を継ぎ農業を始めたとのことであった。

帰島後、再び始めた農業は台風に負けず、かつ南国の地の利を得た農業を開発することであった。その方法としてパイナップル・マンゴの栽培と牧牛をはじめた。パイナップルは天候の影響を受けやすく、最適出荷時期は短い。それを逆手にとり、東京の大手小売業者へ農園ブランドを付け出荷することとした。はじめから棄却率を大きくとった栽培面積の確保と宅配便を利用した注文者への直配が功を奏した。マンゴは、もともと乾燥地帯の作物であるから、西表では育たない。それだけ手間のかかる栽培であるがため挑戦する気が起きたという。マンゴは実がなるまで長い期間を必要とする作物で、一年中管理が必要であり、人手がかかる。

牧牛は牛を飼うことと、牧草を育てることの二つがある。牧草は夏の間ほとんど手間なく育つが、冬は必要な牧草量の生産ができない。そのためには、今まで夏期のみの牧畜が中心となり、冬は牧草や飼料を島外から運ぶしかなく、高コストになっていた。また、餌の品質が牛の成育に大きく関わるため、牧草が餌として最適な状況になるよう栽培・収穫・保存を考えなくては成らない。その為、雨量とその後の晴天日数、潮風のあたりを記録し収穫するとともに、寒冷地の牧草を導入することにより、年間を通じて高品質の牧草生産に目途が立ったという。そのことは牛の品質を一定に保ち商品価値を高める結果となる。

これだけ手を広げた専業農家は西表では他に例を見ないと技術指導をしている東海大学沖縄地域研究センター所員は話していたが、技術が安定すれば他の農家にも適応できる技術に育つ可能性はあるとOY氏は話していた。

とにかく、彼の労働時間は長く、朝早くから、夜遅くまでスケジュールがいっぱいであるが、これをこなす「コツ」は三つあるという。必ず水分はしっかりとること、昼寝はだれにも妨害されない、趣味を持つことという。彼の趣味は、ほかの誰も知らない山の中に入り、イノシシを狙うこと、マングローブのこんなところにもいるかというガザミ（どろがに）をとること、自分の船で釣りに出ることの三つである。季節によってそれぞれの趣味は違うものの、都会人の言う「アウトドアスポーツ」を十分楽しんでいる。

彼は、この西表の山がある限り、山に住むイノシシも、マングローブに住むガザミも、そして島に近づく魚たちも、いつも楽しませてくれるという。この三種の生物は生息する場所は違うものの、山の森と水が育んでいるという。

新しいホテルが建つと多雨の西表であっても水不足に陥る。町の行政センターが西表に異動することが決定されたが、それにともない住民の増加も予想される。西表の水は他の三つの島にも送られているが、水源は限られている。他に方策をとらなければ、水不足は遅かれ早かれやってくる。いくつか大きな川があるが、おそらく、一つに貯水用ダムを造ることになろう。その為には、山と川とマングローブと珊瑚礁とそしてそこに住む希少生物たちを失わなければならない。それは回復不能の手術であること、最終手段であることと理解し、その手術の決定者は、人類に対して弁明をしなくては成らない。

ホテルが建つと言うことは、地域住民の生活向上という圧力がはじめにあって起きたわけではない。生活向上のための圧力は常に働いてはいるが、それが噴出する先がホテル建設に向かうことは、島外の経済ニーズがあって初めて起こることになる。

その島外ニーズ、それはすなわちツーリストのニーズである。従来、マスツーリズムを中心とした観光は、大量高速輸送に支えられた新たな成長産業であったが、参入企業も増加し、コンテンツも不足し始め、中小の観光地にも大資本の観光業者が入り込む。彼らは、全体の収益を上げるためであるから、中小の観光地は全体を調整するための balanサーとして利用される。

どちらにしても移り気なツーリストに左右される脆弱な観光行政は、最終的にレジデントが背負い込むしかない。

過去に於いて、西表島うなり崎御獄跡地に建てた「太陽の村」が倒産し、また西武が開発を目指したが傷跡を大きくしただけで地元に残らなかったことはツーリストで知るものは少ない。

レジデントのしっかりとした発言・発信という情報が最も大切なレジャー（ゆとり）資産である。生活と文化、自然に根ざした情報発信は、レジデントが造りあげてきたプロムナードである。

7) プロムナード（逍遙）

駅前再開発の目玉、プロムナードは本来散歩道である。歩行者専用道路であるが、どこも遊びや面白みがな

い。それは、混雑する駅前の合理的な移動手段としてとらえられているからか。古くからある駅前の曲がりくねった道に並んだ商店街の方がよほどまた来ようと言う気になる。巨大商業施設内のギャラリーは、駅のプロムナードより散策に適していることが多い。しかし、同じような店が似た様なシグナルを発信し、単調さの連続は頭痛のアウラを感じさせる。ミラノのヴィットリオ・エマヌエル2世アーケードは「ガレリア」として知られたところだが、居心地が良く、直射光をあまり好まないヨーロッパ人の町らしく、光の周り具合や、通路の淀みなど、ゆとりを感じさせるプロムナードだ。

おそらく多くの人が自分の好きな散歩道のイメージは持っているかもしれない。学校からの帰り道、会社からの帰り道、旅からの帰り道。帰ってくる道は、そこに自分のホームがあると信じているからこそ安心という充足感を得る。ところが散歩道は行き道である。旅行も行き道。旅行や散歩の前に帰り道にわくわくすることはスキー場のリフトや駅伝の折り返し点、もしくはジェットコースターのトップ点ぐらいであろうか。多くは、行き道に期待を寄せている。

行き道の期待は、淀みと交流、移動パーティー、お祭りなど様々なものがプロムナードに準備されている。

スペインのバレンシアで行われるサン・ホセ祭は、町全体が劇場となる。プロムナードを練り歩き、さながら移動パーティーである。日本国内の商業化されたお祭りや道路として完全舗装された上で行われるお祭りではなく、泥臭く、観光客もお祭りに同化できる。

それは、町の生活を支えている動脈が流通機能としてしか考えていない合理的な道路ではなく、プロムナードであるためか。

おそらく、日本のゆとりある町づくりを考えたときに、生活基盤としての多機能で雑多性の高いプロムナードがキーワードになると思われる。